

第1回～第3回未来共創チーム会議の意見まとめ

<p>1 個性が際立つ多様な人・価値観の共存</p> <p>○いろんな価値観を大事にしている ○不思議なことをしている人たちが妙に際立って変なことをやっているということにならない ○どんな人でも居場所を見つけられるのが京都の土壌 ○京都の人は灰汁が強いが人情味がある。周りへの配慮、ほどよい衝突がある (キーワード) ・それぞれの軸を大事/リスペクトしている ・奇人が溶け込むまち ・場を「見つけられる」、共存できる ・ひとりひとりにポリシーがある ・灰汁が溜まっている、溜まっていく</p>
<p>2 市民が醸す強い信頼関係と責任感</p> <p>○ものごとをWeで考えるのが京都。 ○このまちをみんなで作るとする信頼があるから守り続けられる (キーワード) ・責任、規律 ・みんなで作るとする意識</p>

<p>3 人と歴史が紡いできた多層的な文化</p> <p>○東京に対してカウンターカルチャーが出やすい ○インスタントではないことこそが京都のまち ○文化という大事な基盤が分母にあるので経済活動ができる (キーワード) ・新しいカルチャーが生み出せる ・インスタントではない文化 ・文化分の経済</p>
--

<p>4 伝統や歴史を身近に感じられる</p> <p>○神社仏閣の歴史的建造物が観光的な資源というよりはくらしに近いものとして身近にある ○伝統的なくらしや建築を日常的に体験している (キーワード) ・宗教施設や歴史的建造物とくらしの距離 ・歴史的なものと同居</p>

<p>5 ゆったりとした時間軸</p> <p>○京都はまち全体、人の時間の流れがゆったりしている (キーワード) ・ゆったりとした時間 ・余白や季節の変化</p>

<p>6 本物を見極め、価値を生み出す力</p> <p>○近くに本物の手わざがある。それがまちなかにある状況で生活していると、自然に目が肥える。 ○1200年の歴史の積み重ねが、見えないものを価値として捉え、敬意を払っている ○過去から引き継いできたものを再文脈化している、大事なことを自分なりに再解釈して、今の時代にフィットさせている人が多い ○深い思想に没頭できるのが京都 (キーワード) ・本物が本物として存在できる ・本物に触れられるまち ・目に見えない価値を価値と捉え評価する ・価値の再発見、再規定 ・創作と思索の都市</p>

<p>7 変えること、変えないことの両方を大事にしている</p> <p>○時代に応じることを自然にやってきた老舗企業や長寿企業 ○京都は伝統だけでなく、最新技術に対しても投資していく、両方のバランス感がある ○外のものを取り入れながら共生し、変化するという心持ちが必要 ○変わらないものだけが京都じゃない、というところは共通認識を持っておくべき (キーワード) ・変わらないために変わってきた ・伝統と技術のバランス ・変化を拒まない ・非京都らしさの取り込み、受け入れ</p>
--

<p>8 つながる場が多様にある</p> <p>○川や広場、喫茶店、バーが公共ではないが集える場所になっている。何かコミュニティの場として機能している。 ○京都は目的なしでいられる場所がすごく多い。</p>

<p>9 コミュニティの有機的な連動</p> <p>○小さなコミュニティがたくさんあり有機的に連動していることは面白い ○京都は深入りしすぎず、でも存在は知っているし、挨拶もするという認識が防災でもある (キーワード) ・小さなコミュニティの有機的な連動 ・ちょうどよい距離感</p>

<p>10 消費型ではないまちづくり</p> <p>○消費したい人が増えるのではなく、守りたい、継承したい、広めたいと思ってくれる人を増やすことが重要 ○京都は消費してこなかったからこそ「らしさ」が続いている。 (キーワード) ・消費したいから守りたいへ ・消費型の観光から創造型の観光へ</p>

<p>11 つながりのデザイン</p> <p>○観光客も含めて、入って出て行く人と何かをつくることは大事 ○薄くつながっている人もある種の主体として捉える。今は住んでいる人の権利が100で薄いつながりの人の権利は0だが、もう少しそこを滑らかにして0.01でも権利を付与する (キーワード) ・薄いつながり ・京都のまちづくりや価値創出に関わる取組</p>
--

<p>12 京都のレギュレーション、ルール(=らしさの再定義)</p> <p>○スクリーニングの基準が変わってきたことが問題 ○何でもかんでも残そうとするのではなく、定数であり続けるべきところは定数で、変数として変わるべきところは変わり続けていくところを見極めていく (キーワード) ・京都らしさを生み出す都市のスクリーニング機能 ・圧倒的な差別化志向 ・都市の奥行 ・定数と変数を見極めていくライン</p>

<p>13 多層的な入口</p> <p>○京都との関係性の深さを層に分けて、層ごとに関わり方の入り口を設ける方が良いのではないか</p>

<p>14 人を基軸にしたまちづくり</p> <p>○面白い人がたくさんいるから、彼らを輝かせることが大事 ○クリエイティブな人がいるまちなので、具体的なアクションは個人に任せるほうが面白い ○アナログな人間関係や声掛け、地場のつながりは、頻度として減っていても、重要性は必ず増していく (キーワード) ・モノではなく人</p>

<p>15 無計画をデザインする</p> <p>○計画的過ぎると京都に合わない。 ○ボトムアップで作られていく方が京都らしい。安易に型にはめたり、海外に追随するというのは京都には向いていない。 ○京都は豊かでモノが多く、余白がない感じがする ○みんなが有機的に動いていくのは、きっとHowが提示されておらず、自分たちで考える余白があるから。 (キーワード) ・地場にあるものを耕す ・生み出すための余白</p>
--

<p>16 生態系全体で価値を捉え直す</p> <p>○これからの都市は人間だけではないアクター、例えば自然や動植物、微生物も含めてサステナブルな、循環型の社会を考えたい ○今まで目を向けていなかったところに可能性があり、これは価値観が豊かであると見つけられるようになる (キーワード) ・リジェネラティブへの転換</p>

<p>17 ハブの創出、横断人材の創出</p> <p>○今は一人で生きていける時代になっているが必ず揺り戻しは来る。能動的に負担の分担、再構築が必要 ○分野横断的な人材は必要 ○小さなリーダーやそれぞれのコミュニティや共感のものでつなげる関係性の中で、それぞれをつなぎ合わせるハブや人がいるのが良いまちの姿 (キーワード) ・地域と行政が連携してフォローできる体制づくり ・小さなリーダー</p>
--

<p>18 触れる、体験する機会を増やす</p> <p>○体験できる場を作らないと、文化同士の距離も開くし、京都人が体験していないことは説得力を持って発信していけない。 ○使う人がいなくなると、アクティブさもなくなり、保存に目を向ける人もいなくなる悲しい連鎖になっていく。文化は常に生きている。遺跡の形で遺すことも重要だが、緩やかに動いているという文化を捉える。 (キーワード) ・触れる機会を増やす ・文化を活用する意識</p>
--